





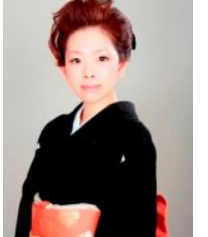




(公財)ポークラ伝統文化振興財団  
 平成24年度 第32回『伝統文化ポークラ賞』を決定  
 ～工芸・芸能の分野9件が受賞～

公益財団法人ポークラ伝統文化振興財団(理事長 佐野文比古)は、顕彰事業の一環である第32回『伝統文化ポークラ賞』の各受賞者を決定しました。今年度は優秀賞2件、奨励賞2件、地域賞5件合計9件を表彰します。ポークラ・オルビスグループは、「財団法人ポークラ伝統文化振興財団」を昭和54年12月に設立し、文化を通して人間の本質を貫く感性を継承する活動の支援を続けています。『伝統文化ポークラ賞』は、伝統工芸技術や伝統芸能、あるいは民俗芸能・行事など無形の伝統文化の分野で貢献され、今後も活躍が期待できる個人・団体に対して贈呈し、更なる活躍と業績の向上を奨励して表彰するものです。昭和56年の第1回から今年で延べ268名の方が受賞されることとなります。なお、賞贈呈式は、10月10日(水)、ANA インターコンチネンタルホテル東京にて執り行う予定です。

## 【受賞者一覧】

賞	受賞内容	受賞者・代表	賞	受賞内容	受賞者・代表
優秀賞	香川県 蒟醬 <small>きんま</small> の制作・伝承 山下 義人(60歳)		地域賞 (北海道・東北ブロック)	北海道 江差追分の伝承・普及 江差追分会	
優秀賞	大阪府 人形浄瑠璃文楽人形の 伝承・振興 吉田 玉女(58歳)		地域賞 (関東ブロック)	東京都 漆刷毛の製作・伝承 田中 信行(62歳)	
奨励賞	岐阜県 緑釉陶器の制作・継承 鈴木 徹(47歳)		地域賞 (北陸・甲信越・東海ブロック)	岐阜県 数河獅子の保存・伝承 数河獅子保存会	
奨励賞	京都府 柳川三味線の伝承・振興 林 美音子(31歳)		地域賞 (中国・四国ブロック)	島根県 鹿子原虫送り踊の保存・伝承 鹿子原虫送り踊保存会	
			地域賞 (九州・沖縄ブロック)	沖縄県 宮古上布の制作・振興 新里 玲子(63歳)	

## ◇「伝統文化ポーラ賞」表彰の趣旨

わが国の貴重な伝統文化に貢献され、今後も活躍が期待できる個人または団体に対し、更なる活躍と業績の向上を奨励することを目的とします。具体的には伝統工芸技術や伝統芸能、あるいは民俗芸能・行事など無形の伝統文化の

1、保存・伝承のために欠くことのできない基礎的な仕事

2、「技」または「芸」または「行事」等の保存・伝承

3、保存・振興のための研究や普及活動

を対象とし、これを顕彰するものです。

## ◇表彰内容

1) **優秀賞** 賞牌・賞状・副賞(100万円)

永年地道に努力・精進され、優れた業績を残し、今後も一層の業績を上げることが期待できる個人または団体。

2) **奨励賞** 賞牌・賞状・副賞(50万円)

将来に向けて、大きな業績を挙げ貢献することが期待できる比較的若い個人または団体。

3) **地域賞** 賞牌・賞状・副賞(50万円)

地域において、これまでに優れた業績を残し、今後も一層の業績を上げることが期待できる個人または団体。

(全国を「北海道・東北」、「関東」、「北陸・甲信越・東海」、「近畿」、「中国・四国」、「九州・沖縄」の6ブロックに分けて選考。)

### 【メディア関係者さまのお問い合わせ先】

株式会社 ポーラ・オルビスホールディングス 広報・IR室 菊池(m-kikuchi@po-holdings.co.jp)

〒104-0061 東京都中央区銀座 1-7-7 ポーラ銀座ビル TEL 03-3563-5540 / FAX 03-3563-5543

【お客さまのお問い合わせ先】公益財団法人 ポーラ伝統文化振興財団 TEL 03-5795-1279 / FAX 03-3280-2830

## 【受賞者紹介】

### ◇優秀賞

山下 義人 <sup>きんま</sup>蒔醬の制作・伝承 香川県

山下義人さんは、昭和 45 年磯井正美氏(昭和 60 年重要無形文化財「蒔醬」保持者認定)に師事し、工房で漆芸の加飾技法の一つである蒔醬技術を研鑽した後、昭和 51 年から田口善国氏(平成元年重要無形文化財「蒔絵」保持者認定)のもとで蒔絵技術を習得した。

昭和 56 年より香川県漆芸研究所工芸指導員となり、後進の育成に努めながら制作活動に精進し、昭和 62 年日本伝統漆芸展で文化庁長官賞、平成元年日本伝統工芸展で朝日新聞社賞を受賞し、その後も数々の賞を受賞している。

平成 12 年～16 年金刀比羅宮の式年遷座祭に際し、本宮天井画の「桜樹木地蒔絵」の復元の監修を行い、文化財の分野でも成果をあげ、平成 13 年には香川県指定無形文化財に認定された。

ニューヨーク、デンバー、台湾、パリなど海外の展覧会にも招待出品し、平成 23 年からは、石川県立輪島漆芸技術研修所講師も兼任し、後進の指導にあたっている。

山下さんは漆芸の表現領域を広げ、深みのあるものとしているとともに、水紋、砂丘など抽象的なものから、月、富士など具象的なモチーフにいたるまで、意匠の斬新さもその特徴である。今後も漆芸の分野で重要度も増し、一層の貢献が期待されている。



平成 24 年 7 月撮影  
蒔醬剣で蒔醬彫りの作業風景

吉田 玉女 人形浄瑠璃文楽人形の伝承・振興 大阪府

吉田玉女さんは、昭和 28 年大阪府に生まれ、昭和 43 年 14 歳で吉田玉男師(昭和 52 年重要無形文化財 文楽 人形浄瑠璃文楽人形 保持者認定)に入門し、翌年昭和 44 年大阪朝日座で初舞台を踏んだ。

入門より師の足遣いとして修業し、昭和 55 年より師の左遣いを勤め、師の多くの当たり役を間近で薫陶を受け、芸風・芸格を受け継ぐと共に、日夜努力研鑽し、また後進に伝えるべく努めている。

昭和 50 年国立劇場奨励賞、昭和 54 年文楽協会賞を受賞し、その後も大阪府民劇場奨励賞、関西芸術大賞ゴールデン賞、国立劇場文楽優秀賞等数多くの賞を受賞している。

現在、文楽の立役(男)人形遣い第一人者として誰もが認める存在で、伝統ある古典のみならず、新作演目にも独自の解釈を持って正しく演じている点など高く評価されている。

国立劇場養成事業の文楽研修講師を長年勤め、後進の指導・育成にも努めており、平成 17 年より公演の左遣い、足遣い配役決定の小割委員を担当している。

文楽界全体を牽引する立場にまで成長した玉女さんは、今後も大いなる活躍が期待されている。



『ひらかな盛衰記』「逆櫓の段」  
船頭松右衛門実は樋口次郎兼光  
2011 年(H23) 9 月 文楽公演  
東京 国立劇場  
撮影 渡邊 肇

## ◇奨励賞

### 鈴木 徹 緑釉陶器の制作・継承 岐阜県

鈴木徹さんは、昭和 39 年多治見市に生まれ、昭和 62 年龍谷大学文学部史学科卒業、昭和 63 年京都府陶工職業訓練校成形科を卒業後、志野や織部など桃山時代に焼造されたやきものの伝統と歴史が残る岐阜県多治見市で作陶活動を展開している。

鈴木さんは、その中で銅緑釉を基本に作品の制作を行っており、その緑色の釉薬を施したやきものは、美濃では織部と称して極めて馴染みの深いものだが、自身が生み出すそのやきものに織部の名を付けていない。鈴木さんの言葉を借りれば、「織部という範疇では語るができないような作品をつくりたい、美濃という地域を超えた仕事をしたい」という思いがあるからだ。

作品は、長方皿、浅鉢、深鉢、壺、茶碗、組皿、湯飲みなど多岐に亘り、そして共通して見られる特徴が、とくに力をいれている泥刷毛目や櫛目状の線彫りなどの手法であり、また、釉薬の濃淡の変化は緑一色といってもその色合いは深く、濃淡の違う数色の緑釉を模様の強弱に応じて意識的に使い分け、さらに深みが増すように計算している。

平成 3 年日本伝統工芸展入選以来 18 回入選し、他にも数多くの賞を受賞している。また、平成 9 年には日本工芸会正会員となり、日本橋三越本店美術画廊、名古屋松坂屋本店美術画廊など数多くの個展を開催している。

今後、ますますの活躍が期待される陶芸家である。



平成21年頃、素焼をした素地に緑釉を施釉しているところ

### 林 美音子 柳川三味線の伝承・振興 京都府

林美音子さんは、昭和 56 年京都府で生まれ、地歌・箏曲の古典を実母林美恵子師、柳川三味線の手ほどきを津田道子師、現代音楽を沢井忠夫師に師事、継承者の少ない柳川三味線の将来への伝承に大きな期待が寄せられている。

柳川三味線は、柳川檢校(?～1680)を流祖とする、地歌三味線の最古の流派「柳川流」が 300 年を超えて現代まで伝える、全体にやや小振りで棹も細めの三味線である。また、柳川三味線で使用される撥は、小振りの象牙製で、握りから先端にかけてかなり薄くしなやかで、胴皮に打ち付けずにヘラで練り物をこねる様に弾き、その音色は、深い響きを持つ重厚な味わいがあるが、技巧的、音量的に難しい点もあり、現在までに様々に改良が試みられてきた。

「柳川流」は、現在は京都でしか伝承されておらず、京都では、流祖以来の「柳川三味線」が廃絶しないようその伝承に力が注がれ、伝承者として林美音子さんに大きな期待が寄せられている。

林さんのここ数年の活動は注目を集めており、平成 22 年文科省・文化庁連携事業による「子供のための優れた舞台芸術体験授業」補助講師、平成 23 年日本伝統文化振興財団「邦楽技能者オーディション」合格、同年文化庁芸術祭参加公演として初リサイタルを開催し、積極的に柳川三味線を採り上げている。若手の逸材として、今後ますますの活躍が期待されている。



文化庁芸術祭参加公演「林美音子 地歌リサイタル」  
2011年11月8日  
於：京都府民ホールALTI

## ◇地域賞

### 《北海道・東北ブロック》江差追分会 江差追分の伝承・普及 北海道

江差追分会は、明治42年追分節正調が確立され、昭和10年各派が合同し追分会発足以来、江差追分の郷土における民俗芸能としての文化遺産価値の重要性を唱え、その保存伝承と普及に努めてきた。そして、昭和38年にその普及振興と後継者育成のために第1回江差追分全国大会を開催し、内容の充実を図りながら、今年9月開催予定の大会で50回を迎えることとなる。

その間、江差追分並びに郷土芸能を通じて石垣市との文化交流事業の開催や、江差追分を南アジア・モンゴル・アメリカなどの海外に派遣し、国際理解と国際交流を図り、着実にその実績に基づく効果をあげている。昭和46年北海道文化奨励賞、昭和60年北海道文化団体協議会「芸術新賞」、平成2年北海道文化賞、平成4年北海道開発功労賞など数多くの賞を受賞しており、江差追分会の組織は、平成24年4月現在支部数159支部(内海外5支部)、会員数3,636名を数える。

これまで支えてきた町民と全国から出場するために足を運んだ多くの愛好者の方々がおられ、今後ますますの発展を期待したい。



平成23年9月 全国大会風景

### 《関東ブロック》田中 信行 漆刷毛の製作・伝承 東京都

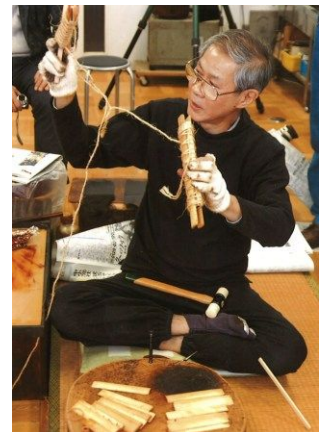
田中信行さんは、昭和25年東京に生まれ、高等学校卒業後父正治氏のもと家職である漆刷毛製作の手伝いを始める。家職の漆刷毛製作は祖父辰五郎氏が鳥越(東京都台東区)の泉さん(分家で明治末頃絶家)で修業、それ以後漆刷毛製作を家業とし、昭和59年正治氏の引退に伴い、家職を継ぎ今日に至っている。

日本の誇る漆工芸において、漆刷毛はなくてはならない道具であり、その果たす役割は大きい。現在わが国において漆塗り刷毛を製作しているのは田中信行さんと文化財選定保存技術保持者の指定を受けておられる泉清吉氏の二人だけになっている。

田中さんの作る刷毛は、実に美しく、完成度は高く、使い心地も非常に良いことは言うまでもなく、その刷毛を多くの漆芸家、地場産業の漆塗り職人、指導者や漆を学ぶ学生などが使用している。また、刷毛問屋を通して他業種へも刷毛を提供している。

田中さんは、自らもつ刷毛製作の技術を後世に残すべく多くの努力をしている。平成22年度から東京藝術大学美術学部工芸科(漆芸)の非常勤講師として、さらに平成23年度からは日本文化財漆協会の「漆刷毛製作の伝承者の養成研修」の講師として、その技術を積極的に公開している。

田中さんの今後一層の活躍と、後継者となるべき人材の確保を期待している。



平成23年11月東京芸術大学漆芸研究室での集中講義に於ける一場面(巻き込み作業の説明)

## 《北陸・甲信越・東海ブロック》数河獅子保存会 数河獅子の保存・伝承 岐阜県

数河獅子は、毎年9月5日に行われる飛騨市古川町数河地区の地元神社の例祭で奉納される民俗芸能で、大宝年間(700年頃)、新羅の僧・隆観がこの地に伝えたと言われている。

昭和30年岐阜県重要無形民俗文化財への指定を経て、数河獅子保存会は昭和45年に設立され、現在約30名の会員が所属し活動を行っている。

獅子舞は、「曲獅子」、「天狗獅子」、「金蔵獅子」の三段から構成されている。一段目の「曲獅子」は雌雄二匹の獅子が大自然を相手に狂気乱舞する姿を現した舞いで、勇壮で躍動的な獅子舞である。二段目の「天狗獅子」は、獅子・天狗・猿・熊の踊りで、ズワエと呼ぶ長い竿を持った猿に釣られた獅子が狂い、それに怒った天狗が獅子を倒す物語である。三段目の「金蔵獅子」は、獅子を追い払い退治しようとする金蔵が、ヒョットコ、オカメと奮闘する舞いである。それぞれの段に見応えがあり、三段全体で見飽きることのない獅子舞となっている。

本来、神社で奉納される獅子舞であるが、近年では地元イベント、さらに県内外および海外においての公演活動にも積極的に参加し、飛騨地区の伝統文化の普及活動に広く貢献し、数々の表彰、感謝状を受け、平成21年には地域伝統文化功労者表彰を受賞している。

後継者の確保とその育成に努めつつ、地域の伝統芸能の保存継承を続けるとともに、海外に向けた民俗文化の普及に尽力しており、保存会の活動は地域の活性化にも大きく貢献している。



2007年9月の例祭における曲獅子の様子。  
雌雄二頭の獅子が大自然の中で狂喜乱舞する姿を表すため、曲芸の限りを尽くす。

## 《中国・四国ブロック》鹿子原虫送り踊保存会 鹿子原虫送り踊の保存 島根県

島根県西部の県境付近に邑智郡邑南町が位置し、この地に古くから伝わる民俗芸能のひとつが石見地域矢上地区鹿子原集落の「鹿子原虫送り踊り」である。この踊りは、農作物に取り付く害虫を追い払う儀式として古くから伝わっているもので、毎年七月二十日の土用の入り、地元三穂両神社を皮切りとして、炎暑の中、商店街・役場・農協等で踊りを披露し地元氏神の諏訪神社で終わる。踊り子は太太鼓6名、小太鼓3名で、いずれも季節の花「ネム」の花にあやかり赤色粉で染めた和紙を垂らした饅頭笠を被り、揃いの浴衣に襷を掛ける。行列は「無形文化財鹿子原虫送り踊保存会」の旗もち1名を先頭に、害虫の霊とされる乗馬姿の藁人形が続き、他に音頭2〜3名、笛1名、鉦1名が加わる。

この踊りは、農民の素朴な願いや慣わしを受け継ぎながら、第二次大戦下でも休むことなく集落ぐるみで今日まで舞い続けてきたのが鹿子原の虫送りである。今なお古形を残す全国でも希少な祭であり、昭和42年島根県無形文化財に指定され、国内はもとより海外からの要請もあり、民俗芸能を通じた文化の場としても保存会の存在意義は大きくなっている。

平成3年アメリカのニューヨークで開催された「島根文化祭」で踊りの披露を行ったのを皮切りに、全国規模での活動を実施しているほか、全国高等学校総合文化祭に参加する県立矢上高校の生徒に約半年間継続的指導を行うなど、後継者の育成も熱心に行っている。



平成24年7月20日  
虫送り踊の一場面

## 《九州・沖縄ブロック》 新里 玲子 宮古上布の制作・振興 沖縄県

新里玲子さんは昭和 23 年生まれ。

宮古上布は、苧麻を原料とする麻織物で、15 世紀ごろから織られていたと考えられており、1583 年琉球の王に献上された「綾錆布」が歴史に残る最初のものである。

昭和 47 年新里さんが下地恵康宮古上布工場へ入門した当時は、緻密な紺十字緋一色の宮古上布であった。そのような中で「宮古島の海が織りたい」、「宮古上布は何故一色なのか」という思いから歴史をひもとく作業を始め、琉球王朝時の御絵図にみられる彩り豊かな宮古上布の存在を知ることとなり、昭和 50 年下地さんの工房を辞め独り立ちし、島の植物染料による色上布を織り始めた。

新里さんはかつての宮古上布の姿に新たな可能性を感じ、研究を重ね現代の宮古上布として道を拓いてきた。

その間にのびやかな色上布の作風を確立し、平成 7 年日本伝統工芸染織展「日本経済新聞社賞」受賞など県内外の公募展で入賞する等、高い評価を得ており、平成 23 年には日本伝統工芸展「奨励賞」を受賞した。

現在、昭和 53 年国の重要無形文化財に認定された「宮古上布保持団体」の代表を務め、後進の指導育成、伝統技法の調査研究や復元事業等、会員の技の練磨、資質向上に尽力しており、宮古上布の継承発展に欠かせない存在である。



平成 24 年 7 月 24 日撮影  
経糸巻き込み